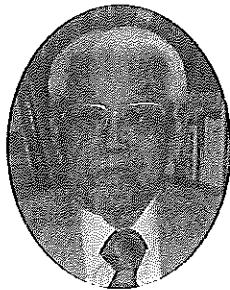


薬剤師はどう戦ってきたのか?!

輝一郎先生に聞く、連載第一回



高橋輝一郎（名誉会員）

大正11年5月4日、横浜市南区万世町に生まれ、明治薬学専門学校を卒業、兵役。昭和21年5月高橋薬局経営。

横浜市薬剤師会、県薬剤師国保組合、横浜市学薬等各種団体の長を務め、昭和38年から、県薬理事、常任理事、常務理事、副会長を経て、61年4月から4年間会長。45年から日本薬剤師会代議員、理事、常務理事、副会長。

また、日本薬剤師連盟の幹事長を務め、参議院選挙に石井道子を擁し、当選を果した。

平成20年5月8日、神奈川県薬剤師会において高橋輝一郎先生にインタビューをさせていただきました。参議院に薬剤師・石井道子先生を送った立役者として、また幾多の困難な局面を乗り越えられてきた日本薬剤師連盟の名幹事長として、薬剤師として「輝一郎先生」と言えば知らぬ方はない、神奈川が生んだリーダーのお一人です。

（インタビュアー：広報出版委員会委員長 高橋 洋一）

司会；本日は神奈川県薬剤師会第18代会長で日本薬剤師連盟幹事長を務められた高橋輝一郎先生をお招きしてお話をうかがいます。お近くにいながら、なかなかお聞きする機会がありませんでした。本日はいろいろとお訊ねしたことがございます。先生、どうぞよろしくお願ひします。まず、先日「日薬連だより」ということができました。この一番下の欄に「高野一夫先生」のことが書かれています。先生が政治に関わられたのはこのころからでしょうか？

高橋先生；高野さんはね。ちょっと前。僕が県薬の役員をしていた頃。の方の業績は「距離制限」^(注1)をつくったことにある。乱売の時代であったんで、距離制限を設けることによって経済的な基盤を作ろうとした。それで高野さんをたてて（選挙を）やった。

注1. 昭和32年の後半ごろから大阪市の一部現金問屋が卸価格で小売を行なったことに対抗して、付近の小売業者が小売価格を大幅に引き下げて販売合戦を行なつたことに端を発し、その後医薬品の乱廉売が各都市に波及

し、35年2月の東京池袋の乱売合戦で頂点に達した。

一方この頃からスーパー形式、ディスカウント形式による販売形態が医薬品販売業界にも進出し、前述の現金問屋の乱廉売に加えて既存の医薬品小売業者との摩擦が生ずるようになった。

ところが、スーパー方式の参加したその後の流通段階での競争は、他の商品の顧客誘引のため医薬品の原価を割った販売、返品仕入れによる廉売、市場侵入のため資本力に物をいわせ一時的には経営採算を無視した乱売をもたらし、小売業界に大きな混乱を招き、さらに不良医薬品、不正表示医薬品が出まわる等、保健衛生上の弊害が予想されるにいたった。

このような混乱や弊害を防ぐため、昭和37年来数都府県において薬局等の配置を規制する目的で新規開設についての距離制限指導内規を作り、薬局、医薬品販売業の店舗新設に当って行政指導を行ない、混乱の緩和に相当の効果をあげた。しかしながら、この指導内規自体が行政指導の域を出ず、さらにまた同年10月行政不服審査法が施行され、行政庁の不作為に対する救済手段が講ぜられたため、行政指導の行なわれている間許可処分を保留するということが困難となり、行政指導による解決はほとんど期待できない状態となった。

以上の点から薬局等の配置を規制するための法律的根拠が強く要請され、38年3月薬事法の一部を改正する法

律が議員提案によって国会に提出され、同年7月法律第135号として公布、施行された。その要旨は、薬局等の許可について設置場所が不適正である場合不許可にできること、その配置の基準は都道府県の条例で定めることなどであるが、この法律改正により、同年9月岡山県を初めとして薬局等の配置の基準を定める条例が続々制定され、39年2月までに44都道府県で条例が制定、施行され、既存の薬局等から一定距離（100～300mが大半）以内の地域には原則として薬局等の新設が認められないこととなり、薬局等の店舗新設にからむ紛争はここに一応の終止符がうたれた。

司会；高野先生の参議院全国区当選は昭和28年ですね。

高橋先生；そうね。復員してきたころだ。

司会；日本薬剤師会は占領軍GHQ^(注2)の権力を最大限に利用してサムズ勧告^(注3)を引き出しています。それが、27、28年頃になりますと占領政策が終わってしまい、医師会の巻き返しを受けることになります。

注2. General Headquarters（総司令部、総本部）の略。日本史上の用語としては、連合国最高司令官総司令部、連合軍総司令部を意味する。

1945年にアメリカ政府が設置した対日占領政策の実施機関で東京に設置された管理機関。1952年にサンフランシスコ講和条約発効とともに廃止されるまで日本を支配していた。

注3. GHQ公衆衛生福祉部長 軍医 クロフォード・エフ・サムズ (Brig General Croford F. Sams) は昭和24年にジェンキンス博士を団長とするアメリカ薬剤師協会使節団をマッカーサー元帥のVIPとして東京に招き、日本の薬事制度全般の調査とそれに基づく機構・制度の改善勧告を行った。

勧告書

1. 法律上、教育上及びその他の手段により、医薬分業の早期実現のために、

可能なるあらゆる努力がなされるべきであること。医師の仕事は……（以下、薬学教育の在り方、薬事法の在り方など45.まで。省略）

高橋先生；その時にサムズ准将に言わされたことは、医師は薬を売り、歯医者は金を売って、薬局は雑貨を売っているって。だから、我々はこのサムズ准将のいるときに医薬分業を進めなければ、未来永劫できないぞ。ということで勢いづいた。

司会；薬剤師の親がおりまして、日比谷でデモ行進したとか、国会に座り込んだ、という話を聞いています。

高橋先生；事実その通り。日比谷公会堂に集結してね。あの時に指揮をしたのは埼玉の野沢清人だった。あれは衆議院議員で東葉出だな。その方が全国に呼びかけをした。そして、医薬分業推進の会合を開いた。ここにも出ている。これ（神奈川県薬剤師会100年史の写真）。

司会；先生は？

高橋先生；僕も動員されましたよ。まだ、復員したばかりの若い時だ。そして、そのときには、この際に一気に厚生省に旗を押し立てて押しあけ、「分業を推進しろ」という極論があったんだ。野沢清人さんがそれを止めて、僕ら代表者が厚生



医薬分業獲得行進 神田共立講堂からデモ行進（昭和26年5月）

省に行って、みなさんの思いを述べてくる、ということでおさまた。そういう激しい機運がありました。

司会；明治以来、日本の薬剤師の戦いは急進派と稳健派という二重構造で常に動いているように思いますが、高野さんはどちらかというと抑えに回った。

高橋先生；そうです。なぜそういう機運があるかというとね。要望する方はそれによって自分の事業の有利な展開をしようとする。ところが、ここで分業を推進したのでは内部機構がかえって乱れるから、逆に、少し整備をする。

司会；日本薬剤師会100年史を読ませていただくと、後に医師会と話がついて「やりますよ」という段になると、それは大変な作業がまっている。それを考えると、今すぐにやれというのは無理だったんだろうなと思います。

高橋先生；その前提はどういうことかというと、我々、明薬を出たものは経済活動を中心にして薬局を優位に立たせようとした。ところが東薬の人たちはもっと学問をして内部整備をしなければ分業は前に進められないという考えだった。明薬の方は太田哲郎、東京都薬の会長だったね。

司会；この年、女子薬剤師会ができていますね。

高橋先生；それはなんでできたか、というとね。薬剤師には今や男子も女子もないわけ。当時は社会的な格差があった。それに対して秋島ミヨさんが中心になって女子薬剤師会を作ろうと言い出した。そんなもの必要ないじゃないか、という激しい反対論がありましたよ。

司会；当時これをまとめられたのは慶松勝左栄門会長でした。

高橋先生；この方は厚生省のお役人だったよ。僕らは薬専卒業する時に慶松先生に教わった。

司会；歴史を読んでみると慶松会長の時代にさまざまな仕掛けをしている。今日の医薬分業の仕掛けはこの28、29年ごろの時代につくったとい

えるでしょう。

高橋先生；これはやっぱりね。選挙に勝って政治的優位に立ったからできた。

司会；その後、さまざまな活動をするんですけれども先に進まない医薬分業。昭和30年頃にはこれは共産党の言葉ですけれどもオルグ養成をしている。当時は「薬政会」と言ったそうですね。分業推進運動と政治運動が一体化していた。そんな中で「青年行動隊」がつくられた。

高橋先生；うん、そこで望月がでてきたんだ。水野、竹内……青年行動隊（注4.）

司会；後の分業のリーダーになられる方々ですね。この方々を引っ張り出したのは野沢さんだったと書いてある。

高橋先生；その中から望月（正作）君が日薬の専務に入った。戦闘にあたっては、言うだけでなく行動するものがなくてければことは達成しないよ。野沢さんがその前後に亡くなっちゃったんだ。だから、後は結局、望月君が旗を振ってきた。

注4. 東京浅草区（旧区制）内在住の青年薬業者が、政治問題にはノータッチ、純粹の薬事研究団体として結成。たまたま国会を傍聴した一会员が、医薬分業に関する審議が事態重大であることを知り、奮起して政治運動に没入する。昭和30年7月に東京都青年行動隊、9月にこれが中心となって、全国青年行動隊が結成された。分業同盟の野沢会長は「青年行動隊は同盟の別動隊として自由に行動せしめ、その経費面では日薬協、同盟等が依頼した運動については支弁するが、その他の費用は自己負担する」と、その性格を明らかにしている。昭和30年11月 分業宣伝カーのパレード、昭和30年10月から31年3月の間、衆議院議員会所占拠、厚生省廊下、三宅坂、国会議員個人邸などの座り込み陳情などを行った。

司会；その後、昭和31年になると、竹中稻美さんという方が参議院全国区に立っておられますが落選でした。どんな具合だったのでしょうか。

高橋先生；それはね。薬剤師会が結集していないね。薬剤師の共通目標になってない。開局の薬

剤師は竹中を押さねばいけない、と言って都薬が中心となってやりましたよ。だけど、全国に浸透するだけの力になってないの。あんときは。落選してしばらくは福島かどこかの温泉にこもっていたな。

司会；当時ですと日薬の専務理事に谷岡忠二先生というかたがおられて、日本薬剤師会100年史（注5.）を見ると、医薬分業推進の時代、まさに戦略をこの方が中心になって作り、この方が中心になって差配していたのではないかと思うのですがどうだったでしょう。



谷岡 忠二
(1894~1981)

高橋先生；その通り。谷岡さんという人はね。加藤の良ちゃん（故人・加藤良一；神奈川県薬剤師会常務理事）とこの横の通りで開業していました。清水藤太郎先生の腹心ですよ。

司会；清水藤太郎先生は神奈川県薬剤師会の第8代会長

で谷岡忠二先生が第9代会長でしたね。

高橋先生；清水会長の副をやった。彼はすごい弁論のたつ人だった。清水会長が日薬の理事になって降りて、代わりにこの人が会長になった。後に谷岡忠治は日薬の専務理事になって、政治折衝を始めた。選挙演説なんかもうまかったね。医薬分業はかくあるべしとね。

司会；会員に呼びかけ結集させる作業をしつつ、国会に対する請願もこの方のお名前で出されていました。

高橋先生；ああ、そうかね。まあ、だいたい彼が表立って動いた。あのときの日薬会長はだれだった？

司会；高野一夫さんだと思います。

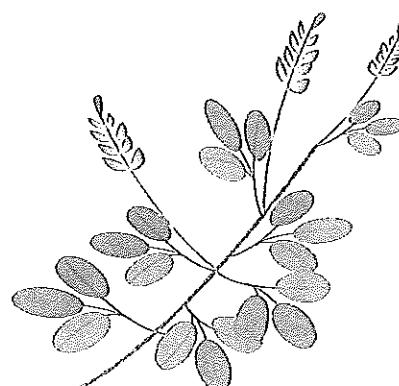
高橋先生；だからね。高野さんよりもむしろ政治工作は谷岡がやった。

注5. 創立百周年記念日本薬剤師会史は、谷岡忠二の編著により昭和48年（1973年）に出版された「日本薬剤師会史」を短縮したものである。創立以来の記録や史料は大正12年の関東大震災による事務所焼失のためほとんど残っていない。谷岡は東京薬舗雑誌（明治12年～）、薬学雑誌（明治14年～）、薬剤誌（明治22年～）をはじめ、日本薬剤師会会報（昭和2年～）ほか関係図書を精査し完成した。

司会；その年の記録を見ると日本薬学会会頭代理に石館守三先生のお名前があります。このあたりはもうセットになって動いていたのでしょうか。

高橋先生；僕が本当に動いたのは石館先生になってから。まだ石館先生は公衆衛生院かなんかのお役人だった。まだ、退職してなかったのね。だけどご案内のようにお家があれで（注6）、薬の世界のことは熟知されていた。

注6. 石館商事株式会社 明治34年（1901年）薬種商として創業した石館喜久造は、青森市議会議長、県会議員をつとめた。



薬剤師はどう戦ってきたのか?!

輝一郎先生に聞く、連載第二回



高橋輝一郎（名誉会員）

大正11年5月4日、横浜市南区万世町に生まれ、明治薬学専門学校を卒業、兵役、昭和21年5月高橋薬局経営。横浜市薬剤師会、県薬剤師国保組合、横浜市学薬等各種団体の長を務め、昭和38年から、県薬理事、常任理事、常務理事、副会長を経て、61年4月から4年間会長、45年から日本薬剤師会代議員、理事、常務理事、副会長、また日本薬剤師連盟の幹事長を務め、参議員選挙に石井道子を擁し、当選を果たした。

平成20年5月8日、神奈川県薬剤師会においてインタビューをさせていただきました。

連載第一回は薬壺9・10月号に掲載。戦後の医薬制度が作られた時期における戦いの記録です。第二回は、日本薬剤師連盟が創設された昭和32年から始まります。

（インタビュアー：広報出版委員会委員長 高橋 洋一）

司会：昭和32年に新政治団体「日本薬剤師連盟」が創立されています。33年ごろ、医療制度の構築にあたって7団体、健保連、国保中央会、経団連、病院協会、全国労働組合会議、新産業別労働組合、それに日薬協が入った、この動きなんでおもしろいなと思ったんですけど。医薬分業をめざす日薬協にほかの6団体がくっついている。

高橋先生：それはね。たぶん東京の動き。すべての情報は東京都薬と日薬の首脳、それで水面下の工作をする。だから、それは外には広まってなかった。

司会：昭和33年に薬事法改正促進全国薬剤師大会が開かれています。岸首相以下政府要人、衆参両議院に対して面会、陳情合戦が繰り広げられたと書いてあります。今までいうロビー活動が活発になってきた時代ということでしょうか。

高橋先生：そうね。だいたいね。それは谷岡さん（故人・谷岡忠二、神奈川県薬剤師会第9代会長）が全部采配を振るった。青年行動隊の活動に待つとか。都薬が主導だね。

司会：記録を見ると与党だけでなく社会党にまで各県代表が議員225人に陳情したとあります。すごいことですね。

高橋先生：なぜそういうことをしたかというとね。まだ、医薬分業というものがね。社会通念に入っていなかった。

司会：議員さんも、薬剤師が何を言っているのかわからない？

高橋先生：まあ、そういうことだね。逆をいうとね、運動する人たちが、各党、各党ですよ。各党に対して運動したんですよ。そして医薬分業のなんだるかをやったわけ。それでね。覚えているよ、あのとき。やっぱり、日比谷の公会堂かどこかでやったときだけね。まだまだ議員は医薬分業については理解していなかったよ。医系議員が反対の意見を述べたことを覚えているよ。

司会：この時代においては医師会との話し合いがつかないまま全く背を向けた状態ですね。学校薬剤師会がでてくるのが昭和33年なんですけれど、学校保健法が公布されて、学校薬剤師が法制化されました。これも薬剤師の歴史の中では大変大きな出来事ではないですか。

高橋先生：医薬分業を推進するためにはね。学校保健法の中に学校医があるでしょ。そういう意味において学校薬剤師もはっきり位置づけする必要があった。法的な位置づけをもたなければだめ

だ、ということなんだ。だけど、それは法的位置づけでね、実際の行動とは程遠いものだよ。

司会；同じ年に、中小企業団体の組織に関する法律公布、というのがあるのですけれど、おそらくこれが小売薬業組合の大本になる法律ではないか、と思います。昭和33年に全国小売薬業団体協議会結成があるので、商組もここでできているんですね。

高橋先生；商組の活動についてはね。まだ分業というものが進んでいないときですからね。薬局の力が弱かった。その力をつけるために商業活動をしなければだめだと考えた。ということで共同組合を設立したんだ。

司会；私が小学校に入る年ですが、当時乱売が激しくなってきて両親は大変困っておりました。そういう勢力への対抗策だったのでしょうか。

高橋先生；必然的なものとしてそれができてきた。内田さんだ^(注7)、ありやあな。内田さんと関口祐太郎さん^(注8)とは東薬なんですよ。そこで、鶴見の内田さんは、俺は商業組合をやる。お前は学校薬剤師をやれ、こういった。

注7. 内田 政道（うちだ まさみち） 神奈川県医薬品小売商業組合理事長、鶴見区・内田薬局開局

注8. 関口 祐太郎（せきぐち ゆうたろう） 神奈川県薬剤師会第14代会長、神奈川県学校薬剤師会会长、緑区・新治薬局開局

司会；昭和34年の1月から国民皆保険制度ができておりますので、だいたい今の制度の基盤が固まってきたのがこの時代ですね。薬事制度調査特別部会というのが薬事法改正問題に向けて設けられておりまして、ここいら辺が薬剤師法への動きが始まっているようです。業務法である薬事法と身分法である薬剤師法を分離しようという動きです。昭和35年になると新薬事法と薬剤師法、薬事二法というのですが、これが成立しています。このときも大変活発な陳情活動があったようです。次の大きな転機を迎えるのは昭和36年です。日本薬剤師会と日本医師会との関係が劇的な転換をした。腹の底にはまだなにかあるのでしょうかけれど、日医が分業の方向で行こうと、当時、武見

太郎さんが日医の会長でした。

高橋先生；その前に。日比谷の大会の時に医師会は医薬分業反対したんだ。そのために、病院の勤務薬剤師会も医薬分業に当時、反対でした。いまの情勢とは違う。

司会；この当時、政治活動の結実とみて良いのでしょう。小売薬業経済安定に関する厚生省の行政指導が強化されています。薬局の適正配置とか、スーパーマーケットの進出抑制、乱売防止などに動きがあったようです。

高橋先生；それはね。いよいよ乱売があんまり激しいので、規制が入る。適正配置をやると、こんどは大型店が反対してね。いろんな混乱が起こった。僕は非常に苦しんだ。

司会；昭和39年になると日本歯科医師会と日本薬剤師会との協定処方が実施されます。

高橋先生；次の年に前の会館ができているんだ。

司会；このころになると三師会という言い方になります

高橋先生；そのころにね。僕は高松さん^(注9)に言われ日薬の方に出た。はじめは学校薬剤師、そのうちにね。石館先生がね、高橋君すまないけど。近藤さん^(注10)と二人でね。新潟の副会長だな。近藤さんが手伝ってくれと。連盟を。

注9. 高松 和幸（たかまつ かずゆき） 神奈川県薬剤師会 第17代会長 横浜市南区開局

注10. 近藤 緑郎（こんどう ろくろう） 新潟県薬剤師会会长、日本薬剤師連盟幹事長

司会；このころに高野（一夫）会長の選挙がまた来るのですが、このときは落選だった。どう理解していいのか。会長の指導力に陰りがでてきたのでしょうか。

高橋先生；いや、ね。実質は距離制限が廃止になったことが響いたね。続いて落選だものね。それで失意のどん底にあったんだ。我々はね。

司会；昭和40年になると、武田孝三郎さんが会長。薬政連も役員が交代していて、この年に大阪の吉矢先生（吉矢佑、後に日薬会長）が副会長になっておられます。

高橋先生；吉矢氏はね。こういういきさつなん

だ。民社党の大坂の市会議員をやった。だからその経歴があるから薬政連の役員にひっぱった。そんなことで、ずっと薬剤師会の仕事をするようになった。

司会；薬政連の会費の問題がこのころ。政治資金規正法による届け出団体となってお金の集め方が変わります。昭和43年、医薬分業推進同盟ができます。この年に満岡さんという方が参議院で落選しています。この方は歯科医師会の方で日薬との共闘でした。

昭和44年には全国衛生主管部長会議で厚生大臣が医薬分業推進を説示と書いてあります。

行政として地方レベルまで医薬分業にするのだ、ということを言ったことになります。

行政的な下地ができ、医薬分業推進予算がつくようになり動き始めています。

昭和46年に坂口徳次郎さんという方が薬剤師の全国統一候補で参議院に立候補されているのですが、残念ながら落選。ただ、愛知県地方区で須原さんという方が社会党から当選しています。この時代は薬剤師議員が不遇でした。

高橋先生；いやあね、坂口徳次郎の選挙は全国的な合意はできていなかった。

司会；惜敗と書いてありますが。

高橋先生；記録の上での惜敗だね。

司会；全国の統一候補を出してゆくプロセスが大事であって、そのところをすっ飛ばしてしまうといふら統一候補と言っても負けちゃうんでしょうか。

高橋先生；共通目標をもたなければだめだね。戦場と同じだ。この戦闘で何をするか、下部組織に理解させないとだめだ。それをね。手抜き工事で突っ込んでゆくとこういうことになる。

司会；昭和47年に自民党薬剤師問題議員懇談会が発足しています。

高橋先生；小沢辰男だ。そちらへんよく覚えている。

司会；衆議院議員、竹内黎一、小沢辰男と協議を続けてきたが社会労働委員会や社会部会に関係する議員を中心とし、原則的には選挙区一区一名を選んでメンバーとすることが決まり、10月12日に東京ヒルトンホテルで設立総会を開催してい

ます。

高橋先生；竹内黎一はね。青森県の出身だったんですよ。石館先生と同郷だ。それでね。僕はそこからが活躍に入るんだ。第一番に竹内が厚生大臣をやった。それだから石館先生に有利に回った。日歯が敗れたでしょ。それだから、竹内さんと同派の斎藤邦吉さんが、二師共闘作戦を展開した。

司会；このころから自民党の薬剤師関係議員がだんだん力を持ってきた。先生はそのへんで間に入られた。政界に飛び込んで政治家との付き合いをされた。

高橋先生；水面下の話は全部そうです。それをね、ただ決まりでやってちゃだめだね。並の苦労じゃないです。だけど、表にでてきたときはだいたい新聞でいうとふた月くらい後だ。新聞に発表になるときはふた月前に全部わかる。そのくらいに小沢辰男さん、竹内さんと付き合った。村の会合まで選挙演説に行きました。

なぜそれをやったかというとね。日本薬剤師連盟というものを社会の人に認識してもらおうと思った。それをやることによって薬剤師会の人たちが協力してくれる。それだからね。わざわざ行っちゃう。

司会；国民に呼びかける姿を見て会員に付いてきてもらう、ということですね。

高橋先生；そう。そして薬剤師が自信を持って行動できるようにする。そうじゃないと薬剤師がただ自分のエゴでやっているととられる。それだけはぜったいに避けなければならない。

司会；この時代の記録を見ますと要望書だの、陳情書だの、どんどん出ていますね。

昭和48年は田中角栄総理の時代で、当時の要望書を見ると「内閣総理大臣 田中角栄閣下」と書かれています。厚生大臣は斎藤邦吉、日本薬剤師会長石館守三の名前です。

この昭和48年に日本薬剤師会は次期参議院議員選挙全国区候補として森下 泰さんを推薦することを決めています。

高橋先生；それは都薬の強力な推薦です。僕は一緒に全国を回ったよ。森下仁丹の御曹司でやってきました。都薬はね、境野君が森下に近いの。陳情なんか出すときにも通りが良い。

司会；そこでリズムが合ってきた。

高橋先生；うん。いわゆる政治情勢が波に乗ってきた。

司会；49年に当選。これもまた、医薬分業の正念場で、この年の保険点数改正で処方せんが出るようになる。

高橋先生；だからね。やっぱり当選者をださなければだめだ、という意識が会員の中に出てくる。政治的に優位に立たなければだめだ、ということがわかった。だから、薬連の金の集まり方もだんだんと順調になってきた。

司会；斎藤邦吉さんというのは？

高橋先生；宏池会の宮沢さんの下。うちへ電話がかかってくるんだ。そこまでいかないとだめだ。森下さんが市会議長になったんですよ。それでね。宮沢さんが宏池会の会長になった。斎藤邦吉さんがその下をやった。……

司会；当時の日薬専務理事は望月正作。この年に適配条例が無くなったのが望月選舉にマイナスだったのでしょうか。

高橋先生；それはもうぜんぜんマイナス。あんときは望月に対して紅白会とかあるでしょう。水野がやってた。望月もこれの旗振りをやってた。都薬はこれに反対だった。最終日に戸塚に斎藤の秘書が来た。望月もうだめです。望月の票は全部他に行っちゃったよ。土壇場でやられる。

選挙の時はたえず敵と接触しなければだめだ。三日でうごくとはそれなんだ。

司会；いろいろ悪い点がでてしまったのが望月選挙 61位 神奈川県が13,567票 田中角栄さんの時代ですね。医薬分業は順調な滑り出しで、次の選挙は関口選挙になるわけですね。政治家との人間関係を作っていく方法というのではやはり選挙でしょうか？

高橋先生；全部そうですよ。無駄なことしたくないからさ。宏池会の言われたとおりにね。

宮古島から富良野まで歩いた。そのかわりいろんなことがわかった。石館先生もすごい。学者っていうより……すごい人だ。選挙っていうのは、いろんなことあったよ。多数の政治家に理解してもらうのは大変だった。

司会；そういう中で薬剤師の代表として入って

応援弁士などをしてゆくわけですね。

高橋先生；橋本龍太郎さんの選挙、応援弁士など頼まれるんだよ。あの人は倉敷だ。近藤さんと一緒に。そういうことを通じて、ものすごい懇意になった。

司会；そこまでの人間関係を作らないと、いくら請願活動をしようとただの紙切れにすぎない。

高橋先生；竹内さんのときなんか青森の駅前で応援演説していて肩に雪が積もった。

司会；歯科医師会と薬剤師会の共闘が始まり、55年石館会長は大平総理のもとで歯科医師会と懇談。

高橋先生；それはねこういうことなんだ。大平さんは宏池会だ。斎藤国吉さんが仕掛け人だ。二師共闘をやる。交代に出す。石館先生がはじめに高橋君これをやってくれと頼まれた。それこそ関口さんのところは全部回ったよ。そのおかげで歯政連の幹部と非常に懇意になった。

司会；この時代の文書を見ると自由民主党薬剤師問題議員懇談会の会長は鈴木善幸さんになっていますね。

高橋先生；そう。これがまたね。面倒みてくれるんだ。あの人も宏池会だ。後に総理大臣になって、ある日うちに電話がかかってくるんだ。床屋に行っていたら急いで官邸にきてくれって。

司会；このへんからロビー活動がさかんになります。分業は順調な滑り出しですが、一方で第二薬局なんていう問題が出てきます。

高橋先生；その時は日薬の常務だったかな。だけど、経済の趨勢はどんどん進んだ。

司会；昭和56年に日本医師会の武見太郎会長が声明を出していますね。日医の主導による全国薬局網を作るんだと。このニュースは良く覚えてます。腹が立つしかたがなかった。

高橋先生；それはね。医師会がこっちを牽制したんだ。本気でやるつもりじゃなかった。

薬剤師はどう戦ってきたのか?!

輝一郎先生に聞く、連載第三回



高橋輝一郎（名誉会員）

大正11年5月4日、横浜市南区万世町に生まれ、明治薬学専門学校を卒業、兵役、昭和21年5月高橋薬局経営。横浜市薬剤師会、県薬剤師国保組合、横浜市学薬等各種団体の長を務め、昭和38年から、県薬理事、常任理事、常務理事、副会長を経て、61年4月から4年間会長、45年から日本薬剤師会代議員、理事、常務理事、副会長、また日本薬剤師連盟の幹事長を務め、参議院議員選挙に石井道子を擁し、当選を果たした。

平成20年5月8日、神奈川県薬剤師会においてインタビューをさせていただきました。連載第一回は薬壺9・10月号、戦後の医薬制度が作られた時期における戦い。第二回は薬壺11・12月号、医薬分業に向けた大詰めの戦いの記録です。第三回は医薬分業が始まった昭和50年ごろから始まります。

（インタビュアー：広報出版委員会委員長 高橋洋一）

司会；この時代の文書を見ると自由民主党薬剤師問題議員懇談会の会長は鈴木善幸さんになっていますね。

高橋先生；そう。これがまたね。面倒みてくれるんだ。あの人も宏池会だ。後に総理大臣になった。

司会；このへんからロビー活動がさかんになってきています。分業は順調な滑り出しだったのですが、一方で第二薬局なんていう問題が出てきます。

高橋先生；その時は日薬の常務（理事）だったかな。だけど、経済の趨勢はどんどん進んだ。

司会；昭和56年に日本医師会の武見太郎会長さんが声明を出していますね。日医の主導による全国薬局網を作るんだと。このニュースは良く覚えています。腹が立ってしかたがなかった。

高橋先生；それはね。医師会がこっちを牽制したんだ。本気でやるつもりじゃなかった。

司会；昭和56年には次の参議院に石井道子先生を出すのだということを日薬連で決定しており

ますね。石井道子薬剤師後援会設立には先生入っておられますね。

高橋先生；何回やってもだめだったでしょう。最後は森下^(注1)がダメ（落選）になってしまったでしょう。それで。いよいよ石井さんが出る。

注1；森下 泰（もりした たい）1921-1987 森下仁丹社長 参議院議員 自由民主党 大阪薬科大学理事長を勤めた。

司会；石井道子の選挙は58年ですから、一年位準備して臨むんですが選挙では落選してしまう。

高橋先生；そこだよ。敗れたでしょう。20位で次点なんだ。しかし、上位で当選した議員が病死しちゃった。それで繰り上げ当選。

司会；選挙が58年6月で、繰り上げが59年9月ですから一年ちょっとある

高橋先生；だからその間に駆け引きがあるその前に、まだある。石井さんが立候補する時に、

秋島ミヨ^(注2)さんがうちに訪ねてきた。石井をやつてくれ。やるようには決してしてくれと。その時にね。これも大切なこと。仕掛けてやる選挙と、いいがね、相手のやる気を起こしてやる選挙と、二つあるんだ。石井さんの場合は、僕のやった手はね。とにかく新人でしょ。それで埼玉県の県会議員のご主人の身代わりでやったんだから。秋島さんも来て、なんとかしてくれと。僕はね。玉虫色の戦術を使った。全体がやる気が起きるまで待つ持久の姿勢でした。

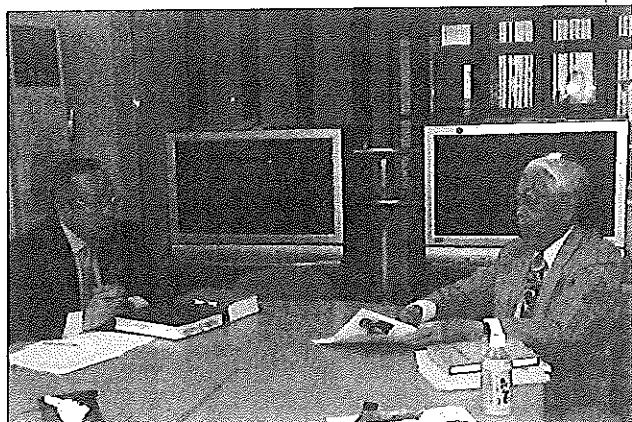
注2：秋島ミヨ（あきしま みよ） 薬剤師 秋島薬品（東京、医薬品卸業、後に「福神」に合併）代表取締役社長 日本女性薬剤師会初代会長を勤め、石井道子参議院議員の誕生に尽力した。平成16年逝去。

司会；実際には他に選択肢はなかったはずですね。だけれども女子薬にお願いに行ったりしなかった。石井道子さんが参議院の時代は、会長が高木敬次郎、総理は中曾根康弘さんですね。

高橋先生；逆に僕はね。高木さんと非常に仲が良かった。

司会；そうこうしているうちに石井道子の次の選挙になって、今度は立派なものですね。12位だ。

高橋先生；それはね。たいへんだったんだから。それで斎藤邦吉さん^(注3)のところに行った。先生ね、簡単な話するけどね。二師共闘は先生が言っ



たんじゃないかな。それで関口^(注4)をやった。関口は当選した。さて、今度はね。うちの方の番だ。今度は二回目だけど。そしたらさ、ふた開けたら12位。選挙の時には機というものがある。機を見極めてバッと敏速に行動して一日で片付ける。

注3：斎藤邦吉（さいとう くにきち）、1909-1992 政治家 自由民主党 衆議院議員 福島県 宏池会 厚生大臣を勤めた。

注4：関口惠造（せきぐち けいぞう）1926-1994 歯科医師 元埼玉県歯科医師会長 1980年の参議院議員選挙全国区で自由民主党公認、日本歯科医師会・日本薬剤師会の推薦で立候補して当選、2期を勤めた。

司会；その次はといいますと、長尾立子^(注5)さん、これは残念ながら落選でしたが。

注5：長尾立子（ながお りつこ）元厚生省社会局長 1992年の参議院議員選挙に自由民主党公認で比例区から立候補したが落選 橋本内閣で民間人として法務大臣を勤めた。翌年、上位の議員が亡くなつたため繰り上げ当選した。

高橋先生；あれはね。やっぱりね。官僚の選挙だな。脂っこい突っ込みがないんだ。だけど人物的にはすごい人だ。僕と藤井君（基之）との関係ができたのはあの時。部外品の選定のときだよ。あの品目を減らすときかな？

司会；あ、薬事法の見直しで医薬品を一般の店で売らせろという動きがあって、医薬品のままではまずいのだが部外品にして扱わせる、そういう動きをした時ですね。

高橋先生；うん。その時に猛烈な反対をした。静岡からね。弁護士立ててせめてきた。だけど石館先生は基本的に合意していた。だからね僕はね、よし、これは火の粉を浴びちゃおうと。覚悟

しちゃった、それこそ言われたよ。だけど、原案通りだった。

司会；ええ、厚生省の。

高橋先生；青柳健太郎っていったかな。都薬から出ていた常務だよ。元東京都の薬務局長。それで青柳君と二人でさ。厚生省に会いに行った。わが薬剤師会はこんどのあれには反対だって始めたわけですよ。何を言うかって、ここまで原案できてんだ。

司会；あれは大きな規制緩和の流れのなかでどこまで守り切れるかということでうね。最後の防衛線をここだと決めたわけですね。

高橋先生；そう。こんどはクリスマスだ。覚えているよ。国会が終わるっている24日。

銀座のね、交詢社^(注6)で青柳君と私と原案を、今言った撤退線を持っていった。そうしたら藤井君が来たよ。ちょうど国会が終わった藤井君。それで話をした。わかりましたと。いうんだ。ここがいいところですね。その場で起案文書をこしらえた。明日、これを持って長尾立子さんがトップをやっておられたんだ。そこへもっていった。これでね、藤井ってオトコはすごいなと思った。境野さんが副会長をされていたので、こんどの時には藤井を候補者にしようって言ったものです。

（

注6；交詢社（こうじゅんしゃ）は1880年に福澤諭吉が提唱し結成された日本最初の実業家社交クラブ。東京・銀座に交詢社ビルがあり、当時ここに日本薬剤師会の分室があった。

司会；その頃が、厚生省の薬系技官と日薬とがうまく回っていた時代だ。

高橋先生；そうね。厚生省の役人とは連絡を密にしていた。

司会；渡辺徹さんが（日本薬剤師会の）専務理

事に入られたのが平成3年ですので、そこいらへんから非常にカゼ通しが良くなつた。

高橋先生；彼ね、やっぱり厚生省の役人やっていて年中、高橋さん大丈夫かって言っていたよ。

司会；明治からの流れを見ていると明治20年代から厚生省の中にいる薬系の方が医薬分業を後押ししてくださって、ようやく二人三脚のようなところでここに至って、医薬分業が成り立った後も、いろいろな細かな問題で厚生省の方とうまくやってきてここまでできているんだけれども、さて、この先どうなってゆくのか。難しいところなんですが、長尾立子さんのあと平成7年にもう一度、石井道子選挙があります。

高橋先生；川崎の会合に出席していたとき、河野洋平さんから電話がかかってきた。自民党の総裁の代理で。高橋さん急いできてくれって、自民党の総裁室に来いっていうの。行ったよ。実はね。今年は社会党は土井（たか子）だ、マドンナ作戦だ。ここは一番ね、うちでも石井さんをトップに着けようって。どうだろうって。いや、先生ありがとうございました、だけどね、うちの方は上位で当選すればいい、一番っていうのはいけない。出る杭は打たれるというでしょう。

司会；それで、その通り5位にしていただいたわけだ。

高橋先生；5位って言ったらね。2時間か、3時間で当選しちゃった。そういう当選していると、大臣になるのが早いんだよ。環境庁の長官。

司会；すごいことになっちゃたわけですね。

高橋先生；その時にもし、一位についたら逆に嫉みが出てくる。この際はここでじっと我慢の子のほうがいいと思って、それで5位、これで良いって言ったらね。目的達せられますかっていうからね。結果は上位当選でしょう、それで大丈夫。心配だったけどね。

司会；このころ政治力としてものすごい強いものをもっていましたね、薬剤師は。当時の国會議員というのは7名だったかな。もうそろそろ松本選挙になってくるでしょうか、平成8年のことです。当時、連盟幹事長になっておられたので、一番判断を迫られるところで、おそらく平成7年の石井選挙の最中からすでに松本純さんの動きはでていたらうと思いますが。

高橋先生；それはね。植松君^(注7)から情報が入ってきた。はじめ市会議員で当選しているんだからね。大丈夫かと。補選のときは全部が総丸めで応援するから票が集まるんだよ、今思ったよ。

だけど、折角そのときは市会議員になつてゐるんだから無理させることはないよなんて言つてね。牽制している。だけどさ、やっぱり今言ったとおり、待ちの選挙だ、当人はやる気十分。

注7：植松和紀（うえまつ かずのり） 横浜市中区開局 当時、神奈川県薬剤師連盟副幹事長 中区薬剤師会の会長として、会員であった松本純氏を育て政界入りに尽力した。

司会；僕ら、松本陣営にいると、みんな冷たいな、と思いましたよ。

高橋先生；待ちの選挙だ。それで、盛り上がつてきたなってわけ。それからだよね。今度は私を立ててきたよ。それでやつた。あの時は支持した各会派の人たちは自分の候補者に方に行くでしょう、だから散っちゃたね。

このあいだの選挙はご案内のように小泉旋風があつたから当選できた。あれも早かった。

司会；松本選挙があつて今度は平成10年に佐谷会長の時代に石川すすむ^(注8)、とお読みしますか。参議院比例区でこれはちょっと失敗だった。

注8：石川晋（いしかわ すすむ）元文部省（現・

文部科学省）審議官 平成10年7月 第18回参議院通常選挙比例区に自由民主党公認、日本薬剤師連盟推薦で出馬し落選。このときの自民党比例区当選は14席。

高橋先生；あれは官僚選挙。上からおろせばやつてくれるだらうって、実際の活動がない。

司会；拘束名簿式で21位でした。その次になりますと平成13年の第一回藤井選挙（平成13年・第19回参議員通常選挙比例区）です。

これは156,380票、神奈川県で7,820票とっています。これは安心した順位だったですね。藤井さんも官僚だったが、その前の石川選挙とどこが違うのでしょうか。

高橋先生；出たところが違う。藤井さんっていうのはね。起案文書でお世話になっている。頭が冴えている、あれは大丈夫。それで藤井さんを強力に推した。

司会；なかなかすごい選挙戦だったと思います。運動も活発でしたが、残念なことにその裏選挙であります小西恵一郎^(注8)、これはひどい結果だった。

注8：小西恵一郎（こにし けいいちろう） 薬剤師 松下政経塾 平成16年 第20回参議院通常選挙比例区に自由民主党公認、薬剤師連盟推薦で立候補して落選した。

高橋先生；小西君は良く知っているんですよ、僕は。彼は一番はじめちょっと、日薬に秘書で勤務したんだ。そのあとね、渡辺……なんだ？

司会；ミッチャーですね。

高橋先生；ああそうそう、渡辺美智雄さんのところに秘書で入った。それで渡辺美智雄さん亡くなつたでしょ、大阪に戻つた。大阪で立候補したんだ。わりに物事はしっかりしているんだけど、

あれは選挙下手だな。展開はどうしたかというとね。局地戦しかしてないんだ。参議院選挙は広域選挙だ。

司会；神奈川県で2,785票しかとれていない。痛かったです。

高橋先生；よく小西君は手紙なんかよこします。選挙は戦争と同じで、場面がどういう場面かよく考えていないと勝てない。

司会；この時代までが薬剤師会は強い政治力をもって、念願だった医療法への明記、医療提供施設、それから薬剤師教育の6年制を実現してきたわけですね。問題はこの次です。日薬は（平成19年・第21回参議院通常選挙）に藤井基之さんを立てたのですけれども、たいへん残念な結果になってしまいました。

高橋先生；なぜだかわかる？あのね。医薬分業というのはね、完全にみんなが理解していた、全国の薬剤師が、例えば女子なら社会的地位が上がる、勤務なら給与水準があがる、こういう風に全部つながる。共通目標だ、ところが今度の藤井さんの場合、薬剤師だから責務上やる、これじゃあ反対されちゃう。わかりやすい共通目標を早くださないとだめ。

司会；薬剤師はどうなりたいのか、明確に打ち出さない限りまた以前のような力の結集というものは難しい。

高橋先生；わかりやすい話だね。ベルリンの壁がなくなったと同じなんだ。壁がなくなったらロシアは分裂しちゃった、それと同じだ。

司会；先に向かっては難しい選挙対策になります。組織の維持さえ難しい、まして自前の議員なんてことは困難になってくるとおもいますが

高橋先生；これはね、早くに共通目標を立てること。みんなが理解できる目標だ。こんどは利害だね。



司会；正直に言ってしまえば、薬局経営が成り立たないということや、過剰になる薬剤師の需給の問題、医薬分業の良い時代はもう終わるだろう、そうなることはわかっているのだからなぜ手をうたないのかということになります。薬局の2024年問題などの危機を共有するなかで政治力をつけてゆかねばならないとも思います。

高橋先生；今すぐ引っ張れるだけの吸引力をもった目標がない。軍隊で言えば戦死者続出すれば連隊長クビだよ。クビにならないでいるからおかしくなっちゃうんだ。本当にたいへんな時代だ。情報収集に場を広げないと。

インタビューを終えて

「これ書いちゃだめだよ」と念を押されたうえで、信じられないようなご苦労話もうかがうことができました。親子ほど年の離れた僕らの世代が、このお話から何を学び、また、どのように後進を育ててゆくか。先生をして「本当に大変な時代」と言わしめた今を、僕らはどのようにリードしてゆくか。いまこそ、政治に対して真剣に取り組んできた神奈川の真価が問われると思いました。連載を終えるにあたり、貴重なお話を聞かせていただいた高橋輝一郎先生に、あらためて心から感謝をいたします。

広報出版委員会・委員長 高橋洋一